

ねんが 年賀はがき

さいまつ ちか ねんがはがき には ほんじん かなら い ひとつに ねんがじょう じゅんび
歳末が近づくと、日本人が必ずと言っていいほどすることの一つに年賀状の準備
あ ねんがじょう しんねん あいさつ だ しょじょう とし かん
が挙げられます。年賀状とは、新年の挨拶のために出す書状のことで、その年の干
し あ どうぶつ え そ おお がんたん とど おく ねんがはがき
支に当たる動物の絵を添えることが多く、元旦に届くように送ります。日本郵便株
しきがいしゃ はっこう かんせい としだまつきねんが ちゅうせん しょうびん あ にんき
式会社が発行する官製のお年玉付年賀はがきは、抽選で賞品が当たるため、人気
たか
高いです。

げんぞん さいこ ねんがじょう へいあんじだい にほん ゆうびんぎょうせい
現存する最古の年賀状は平安時代のものだとしていますが、日本の郵便行政が
ねんが はっこう せんご ねんが さいしょ
年賀はがきを発行するようになったのは戦後になってからです。年賀はがきが最初
はつばい げんざい つうじょう まいとし はつばいかいし
に発売されたのは1949年12月1日で、現在では通常、毎年11月1日に発売開始され
はっこうとうしよ まいすう おく まんまい せんごにほん けいざいふっこう じんこう ぞう
ます。発行当初の枚数は1億8000万枚でしたが、戦後日本の経済復興や人口の増
か こうとけいざいせいちょう ともな ねんねんはっこうまいすう ふ
加、高度経済成長に伴って年々発行枚数が増えていきました。しかし、2003年の
おく まんまい ねんが はっこうまいすう げんしょう つづ ねんよう ねんが
44億5000万枚をピークに、年賀はがきの発行枚数が減少し続け、2020年用の年賀
おく まんまい ねんど おくまい したまわ ねんが
はがきは24億4000万枚で、2021年度は20億枚を下回りました。年賀はがきは、
ねんがとくべつゆうびん と あつか きかんない とうかん ねんまつ ゆうびんきょく と お がんじつ
年賀特別郵便の取り扱い期間内に投函すると、年末まで郵便局に留め置かれ、元日
はいたつ し く ねんが つうじょう ゆうびん ふうしょ
に配達される仕組みになっています。年賀はがきではない通常の郵便はがきや封書
きってぶぶん した ねんが しゅが どうよう ねんがゆうびん あつか
でも、切手部分の下に年賀と朱書きすれば、同様に年賀郵便として扱われます。年
ふ か きん つ ねんがはがき 2種類 あります。
げんざい ねんがはがき 通常はがき 同額 63円
2021年現在では、付加金が付かない年賀はがきは通常はがきと同額の63円です
ふ か きん きふきん ずがとうけいひ の う
が、付加金付きのものには寄付金や図画等経費を乗せて68円で売られているもの
しゃしん いんさつ てき こうたくし はんばい
や、写真の印刷に適した光沢紙の73円で販売されているものなどがあります。

おお ひと むじ こうにゆう ねんがじょうさくせいよう しょう ねんがじょう
多くの人は無地の年賀はがきを購入し、年賀状作成用ソフトを使用して年賀状
そうふさき じゅうしょ かんり おく あいて あ き
のデザインをしたり送付先の住所を管理したりします。送る相手は、あまり会う機
かい かぞく しんせき ふだんれんらく と ゆうじん きんむさき せわ
会がない家族や親戚、普段連絡が取れずにいる友人、勤務先でお世話になっている
じょうし せんばい どうりょう ふく かぞく な ひと ばあい も ふく
上司・先輩・同僚などが含まれます。家族に亡くなった人がいる場合は、喪に服し

ているため、だいたい喪中の1年は年賀状を出さないのが慣習になっています。その際には、毎年^{さい}年賀状^{まいとしねんがじょう}のやり取り^とをしていた人^{ひと}に向けて、喪中^むはがき^{もちゅう}を出し、年賀欠礼^{ねんがけつらい}の挨拶^{あいさつ}を行います。喪中^{おこな}はがき^{もちゅう}を受け取った側^うは、年賀状^とを控える^{がわ}のはもちろん、喪中見舞い^{ねんが}を送^{ねんが}って気遣い^{としだま}を示すのが礼儀^{れいぎ}です。年賀はがき^{ねんが}にはお年玉^{としだま}くじが付^ついており、毎年^{まいとし}1月^{ちゅうげん}に抽選^{おこな}が行われ^{げんざい}ます。現在^{いっとう}、1等^{にと}・2等^{ふくすう}については複数^{けいひん}の景品^{けいひん}の中から好き^{なか}なもの^すを1つ^{ひと}選択^{せんたく}できるよう^{たい}になっているの^{すえとう}に^{つね}対し、末等^{としだま}は常^{きって}に「お年玉切手^{としだまきって}シート」^{とうせん}です。当選^{ばんごう}した番号^{ゆうびんきょく}の付いた^{じさん}はがき^{きって}を郵便局^{きって}に持参^{きって}すれば、切手シート^{きって}は窓口^{まどぐち}で即日^{そくじつ}交付^{こうふ}してもら^{しょうひん}えて、1等^{ごじつ}や2等^{ゆうそう}の賞品^{しょうひん}は後日^{ごじつ}郵送^{ゆうそう}となります。また、無駄^{むだ}を省^{はぶ}くために、書き損じ^かや余^{そん}った年賀^{あま}はがき^{ねんが}は郵便局^{ゆうびんきょく}へ持^もっていき、所定^{しよてい}の手数料^{てすうりょう}を払^{はら}えば、普通切手^{ふつうきって}やはがき^{ふうとう}、封筒^{ふうとう}などに交換^{こうかん}してもら^{こうかん}えます。

SNSの普及^{ふきゅう}などが原因^{げんいん}で年賀状^{ねんがじょう}離れ^{ばな}が進^{すす}んでおり、年賀状^{ねんがじょう}を出す^だのが常識^{じょうしき}という考え^{かんが}も徐々^{じょじょ}に変わ^かってきています。しかし、忙しい^{いそが}年末^{ねんまつ}に自分^{じぶん}と縁^{えん}のある人^{ひと}たちを思い^{おも}ながら年賀状^{ねんがじょう}を用意^{ようい}するのはやはり特別^{とくべつ}な意味^{いみ}があります。日頃^{ひごろ}お世話^{せわ}になっている人^{ひと}への感謝^{かんしゃ}の気持ち^{きもち}を伝^{つた}えるのに有効^{ゆうこう}な手段^{しゅだん}であると同時に、元日^{どうじ}に受け取る^う年賀状^{ねんがじょう}を楽しむ^{たの}みにしている人^{ひと}もまだ大勢^{おおぜい}いるでしょう。